

丸ごと白樺活用、魅力もつと

北海道の景色を彩る白樺しらびを、丸ごと一本活用しようと、家具作家や林業関係者らが動き出した。「白樺プロジェクト」。旭川市で開かれた旭川デザインウィークでは、白樺の家具やクラフト製品などを一体として展示、魅力発信に努める。



上 白樺プロジェクトに携わるメンバーと白樺の家具やクラフト
下 旭川デザインウィークでは、家具やクラフト作品が白樺一本丸ごとの魅力を伝えた。いずれも旭川市

家具作家・林業関係者ら「プロジェクト」

旭川から多様な製品発信

広葉樹の白樺は、道内の山林の各地で見られるが、ほとんどがパルプ用チップとしてしか使われていないという。育っても直径が30センチほどと細く、「柔らかく、家具や建材に向かない」とみられていた。そこで道総研林産試験場(同市)の研究主幹・秋津裕志さん(59)らが、「白樺という豊富な資源にもっと付加価値を付け、利用できないか」と、2015年から活用策の模索を始めた。堅さは、家具材として使われているサクラやクルミなどと同程度であることや、内装材としても使えることなどが分かってきた。この取り組みに興味を示したのが、旭川家具の作家たちだった。

東川町の「木と暮らしの工房」の鳥羽山聡さん(50)は、「大丈夫かな?」と思いつながら家具を作ってみたところ、「北海道らしい、優しい木目と品のあるものができた」と手応えを感じた。白樺の樹皮を使った籠などのクラフト作品もあることから、家具作家や大学研究者、秋津さんらが会合を重ね、「白樺は一本丸ごと木の恵み。この良さを伝えていこう」と、白樺プロジェクトを始動させた。

その最初の取り組みが、19日(23日)に開かれた旭川デザインウィークでのブース展示。会場には、白樺材のテーブルや椅子のほか、食器、樹皮で編んだかご、樹液の飲料水や化粧水などと、白樺の魅力が丸ごと詰め込まれ、訪れる人たちの目を引いた。

秋津さんは「白樺は里山に育っていて搬出も楽で、植林しなくても新しい木が育ちやすいなど、利点が多い。ユーズーと山林を直接つなぐのにも適している」とプロジェクトに期待。鳥羽山さんも「身近にある白樺を使い続けることで、暮らしを豊かにしていきたい」と話している。

(本田大次郎)